

第18回紀友会 講師ご紹介

堀口徳弘氏

和歌山県串本町榎野（大島）出身。58才。1890（明治23）年、榎野崎沖で遭難したエルトゥール号（ ）の生存者に、初めて遭遇した地元住民・高野友吉氏の曾孫。

1974年、近畿大学卒業。串本町役場に奉職。商工観光課長、環境衛生課長を歴任。

100周年、110周年「工号遭難者追悼・日土友好式典」の同町事務方を担当。08～09年、トルコ記念館（串本町）の管理責任者。08年、同国大統領として初めて串本町を訪問されたギュル大統領夫妻を同館にてお迎え。大統領夫妻を殉難将士慰霊碑にご案内。2010年、首都アンカラにおいて開催の「トルコにおける日本年」のオープニング式典に招待され、同町代表者としてスピーチ。文化相らから温かい接遇を受ける。

明治天皇表敬を終え、オスマン帝国初の親善訪日使節団の役目を果たした木造のフリゲート艦工号は帰国の途中、台風に遭遇し座礁・沈没。587名が死亡する大惨事に。榎野灯台下にたどり着いた生存者は、数十メートルの断崖を這い登って遭難を告げる。住民は、荒天にもかかわらず、ただちに出動。救出した生存者を榎野の寺、小学校、灯台に収容。乏しい蓄えのなか、サツマイモ、鶏、鶏卵、衣類を供出。犠牲者を手厚く弔った。こうした献身の結果、69名が翌年、故国に生還。

一連の救出・保護・追悼活動が、日露戦争の勝利とならび、「世界一の親日国家トルコ」誕生の一大要因とされ、今日でも駐日トルコ大使は、新任のたびに同町を訪れている。

森永 勇（たかし）氏

1965年、伊藤忠商事入社。75年、アンカラ事務所駐在。78年～81年、同事務所長。85年～95年、イスタンブール駐在、同支店長。

1985年、イラン・イラク戦争が勃発。イラン国内に取り残された在留邦人の救援に貢献（ ）。海外市場部長（全世界の海外店統括）中東総支配人（バーレーン駐在4年）などをへて、01年～04年、伊藤忠マネージメントコンサルタント社長。06年、退任。99年、トルコ政府より功績賞。現在、日本トルコ協会理事などを務める。

イラン上空の航空機は無差別に攻撃する。こう宣言したイラクに対し、憲法上、海外派兵が許されない日本政府は苦慮。日航の労組は、自社チャーター機による救援を拒否。イランの野村大使は、トルコ大使館のビルレル大使に窮状を説明。「トルコ国民なら、みな工号の歴史を知っています。クシモトのご恩に報いましょう」とピ大使。しかし、戦況はますます拡大の一途。邦人に生命の危機が迫る。

こうした状況下、イスタンブールの森永氏は、三大原則のもとに行動。すべての業務より救援を優先。無理筋の話だからこそ、オザル大統領に直接に打診。変な躊躇は無用。体当たりせよ。政界入り前から、大統領とはトラクター工場の建設などを通じ、親交が深く、信頼も厚い。直接、大統領から「心配するな。すべてアレンジした。モリナガさん」との電話。かくしてトルコ航空2機がテヘランに飛来。600人の在留トルコ人より先に邦人215名が無事、帰還。これは「プロジェクトX」でも採り上げられた。